異世界二度目のおっさん、
どう考えても
高校生勇者より
強い
5
八神凪 Yagami Nagi
Illustration 岡谷

主な登場人物
Main Characters
ミズキ
勇者召喚に巻き込まれたフウタ、カナの幼馴染。落ち着いた性格のインドア派。
フウタ
勇者として異世界に召喚された高校生その1。弱気になりがちだが、芯のある気質。
レスバ
お調子者の魔族。ひょんなことから、リクたちと行動を共にする。
カナ
勇者として異世界に召喚された高校生その2。気の強いギャル。
リーチェ
リクによって創られた人工精霊。リクの相棒とも言える存在。
ファング
旅の途中で拾ったホワイトウルフ。高校生たちによくなついている。
リク
本作の主人公。かつて勇者として魔王を倒した32歳。その力は今も健在で、頼りない高校生勇者をサポートすることに。

# 第一章　交渉と同行

「やっと帰ってこられたわねえ。ハリソンとソアラ、お疲れ様！」
「本当にそうだね。片道だけで二十日くらいかかっちゃったもん」
夏那と水樹ちゃんが丘の下に見える町を見てため息を吐いていた。
俺の名前は高柳陸。しがないサラリーマンだが、実はかつて異世界に勇者として召喚され、活躍したという過去がある。
ある日の仕事帰り、前を歩いていた高校生が勇者として召喚される際に巻き込まれ、俺は再び異世界に降り立つこととなった。高校生達――勇者として召喚された風太、夏那、それに巻き込まれて召喚された水樹ちゃんを守りつつ、俺は魔族との戦いに身を投じていく。
戦いが続く中、この世界にいる魔族達が、俺が前に召喚された異世界にいた魔族と同じ奴らだと俺は気づく。この世界の魔王が前の世界と同じ存在か確かめるべく、根城にする島に向かおうとしたのだが、それにはエルフの森にある聖木を使って船を改造して、海を渡る必要がある。
エルフとの交渉で聖木を譲り受けた俺達は、道中で捕虜として仲間に加えた魔族のレスバと共に、船の改造のためにヴァッフェ帝国へと戻ってきたところなのだ。
ここを離れて二か月ほど経っているので、少しばかり懐かしくも感じるな。

「仕方ないよ、これだけ木が隙間なく積まれていたらハリソン達も大変だからね。それじゃもう少し頼むよ」
風太が手綱を動かすと、最後のふんばりだといわんばかりに馬達の足が速くなった。
町へ入るための門が近くなり、門番をしている兵士がこちらに気づく。すると大きく手を振りながら迎えてくれた。
「よくぞ戻られました！」
「覚えていてくれたか」
「もちろんです。魔族撃退の功労者を忘れるはずがありません！　ささ、お通りください」
「ありがとうございます！」
出発時にも顔を合わせた門番の男が、笑いながら道を開けてくれた。
俺達は手を上げて応えながら町の中へと入っていく。彼らには俺達が勇者であることは告げていないので、あくまでもレムニティ達を撃滅した功労に対しての感謝だな。
「それじゃこのままお城まで行きますか？」
風太が手綱を操りながら尋ねてきた。
「そうだな。休みたいところだけど、先に陛下に報告をしよう」
「ペルレさんやキルシートさん、元気にしているかな？」
そこで水樹ちゃんが城を見ながら言う。
「そういえばそんな受付嬢が居たわねえ。謁見するならレスバはどうするの？」



【また目隠し……ふひ、見える……わたしにも敵が……！】
レスバへ目隠しをしながら夏那が俺に聞いてくる。一応、人間のフリをしてもらっているので会わせるのは問題ない。
目隠しをする理由は、エルフの集落の時と同じくレスバにできるだけ情報を与えたくないからだ。だけど目隠しをしたまま連れ歩くっていうのは、さすがに怪しすぎるか？
謁見は俺だけでもいいだろうし、四人には部屋で待っていてもらうか。
「……あれから襲撃はなさそうですね」
俺が後のことを考えていると、風太が町の風景に目を向けてポツリと呟く。前回の襲撃で瓦礫の山になっていたが、今はかなり家屋が建て直されていた。
「アキラスの時にも言ったと思うが、魔族は手柄の独り占めをしたがる。共闘をしないせいで、情報の共有もできていないんだろう。レムニティが倒されたことが別の将軍に伝われば、ここに来る奴も出てくると思うけど」
【一番近かったグラジール様も倒されたので、ここへ来る将軍はしばらくいないと思いますよ】
「そうなんだ？　平和なのはいいことだけど、いつ敵が来るか分からないのも、それはそれで怖いわよね」
「その通りだ」
夏那が肩を竦めてそんなことを口にし、俺は肯定した。
戦争の間は緊張が続くため、精神的にまいってしまうことはよくある。相手が完全に諦めるか、

倒しきるまで不安を抱えたままの生活を余儀なくされる。
まだこの世界に来て日は浅いが、今まで通ってきた国を見る限り、蹂躙されるまでの事態になっていないのは僥倖だと言えるだろう。
五十年もの間このレベルを維持できていたのは、魔王であるセイヴァーの『せい』であり、『おかげ』でもあると考えると皮肉だな。
魔族の強さを知る俺なら分かる。セイヴァーは本気で攻めていないのだ。
「そろそろですね」
風太が操る馬車は大通りを進み、丘を登って一直線に城へ向かう。
「おお、あなた方は……！　どうぞ！」
「陛下へ知らせてきますね」
城の門番も俺達だと分かった瞬間に通してくれた。それと同時に別の門番が馬に乗って先に城へと走っていった。
俺達はそのままゆっくり移動し、遅れて城の入口に到着する。
そこでは宰相であるキルシートが待ってくれていた。
「リク殿、よくぞご無事で。いえ、当然というべきでしょうか」
キルシートが片手を上げて口を開く。馬車が停まったところで、俺は身を乗り出して話しかけた。
「久しぶりだな、キルシート。早速で悪いがクラオーレ陛下に謁見をしたい。大丈夫か？」
「ええ、もちろん。おや……？　人が増えていますね？」



【……】
そこで隠れるように荷台に座っているレスバを見て、キルシートが眼鏡を上げた。
「ああ、エルフの集落から帰る途中で魔物に襲われていたところを助けたんだ。行くところがないみたいでひとまず一緒に居る。新顔になるし、謁見は俺だけ行くよ」
俺が説明するとキルシートは頷いてから体を城へと向けた。
「なるほど、承知しました。ではフウタさん達は部屋へご案内します」
キルシートはメイドを呼んで風太達の案内をするよう告げる。出会った時と同じくクールな調子だな。目隠しに言及しなかったのは信用があるからか。
「みんな、馬車は俺が厩舎へ持っていくから先に休んでいいぞ」
「お風呂に入りたいわね……ここまで長かったし」
「いきなりは失礼だよ、夏那。ファング、おいで」
「うぉふ♪」
夏那がすぐにお風呂を所望して風太が呆れていた。ファングも荷台から降りて足元に立つ。
【まあ、グランシア神聖国から結構長かったですしねえ】
「先にお風呂でもいいか聞いてみようよ。リクさん、後で謁見のお話を聞かせてくださいね」
水樹ちゃんが笑顔で俺に手を振りながらこの場を離れていき、後に風太と夏那、そしてレスバがついていった。
とりあえずハリソン達も休ませたいが、もう一仕事しないとな。

「もう少し人を呼べるか？　聖木を荷台に少し載せている。どこかに保管したい」
「おお、さすがですね。それでは庭へ運んでおきましょう。そこの君、すまないが騎士を数人呼んでくれ」
「ハッ！」
ちょうど巡回していたところでキルシートの命令を聞いた兵士は、敬礼と共に駆け出していく。その間にハリソン達を荷台から外しておくことにした。
「よーし、お前達もゆっくりするんだぞ」
ハリソン達が首を伸ばすのを見て、俺は首を撫でて頷く。これだけの荷物を曳いてきたんだ、餌は奮発してやりたいねえ。
そんなことを考えていると、騎士を待つキルシートが声をかけてきた。
「謁見で聞けると思いますが……成功、したのですね」
「ああ。エルフの協力を受けることができた。その証として聖木を少し分けてもらい、持ち帰ったんだよ」
「あの頑固なエルフの協力を受けることができるとは……将軍を倒すだけのことはありますね」
「まあな」
俺は荷台から聖木を取り出して一本投げて渡す。キルシートは眼鏡の位置を直しながら感嘆の声を上げた。
「……これは素晴らしい。素人目に見てもこれがいいものだと分かりますよ」



「とりあえずそいつを……っと、先に謁見させてもらおうかね」
「ええ」
ちょうど騎士達が戻ってきたので荷台を彼らに任せて俺とキルシートは城内へ向かう。
途中で巡回の兵士、メイドなどとすれ違いながら目的の場所へ急ぐと、先に話が通っていたようですぐに謁見の間の扉が開かれた。
「よく無事に戻ってきたリク殿」
「お久しぶりですね、陛下。それにヴァルカも」
クラオーレ陛下と久しぶりの顔合わせとなる。隣には騎士団長のヴァルカも笑顔で立っていた。
「よう！　心配していなかったが無事に帰ってきたな。ああ、あの三人も部屋に行く途中会ったぜ。元気そうでなによりだ」
「ペルレとの仲は深まったのか？」
「うるせえよ……!?」
ニヤリと笑う俺を不満そうな顔で睨んできたが、ヴァルカはすぐに肩を竦めて笑っていた。
そこでクラオーレ陛下が口を開いた。
「遠路の往復ご苦労であった。それでエルフ達とは会えたのか？」
「ええ、協力を取り付けてきました。それとキルシートには見せましたが、少しばかり聖木を持って帰ってきましたよ」
「……！　これであの島へ渡る算段ができる、か」

話を聞いて、魔王の島へ行けると、クラオーレ陛下が誰にともなく呟いた。
「今ごろエルフ達は貴重な世界樹を切って木材にしてくれているはず。というわけで――」
俺は今回の移動による成果を口にして、これからの話を続ける。
エルフの森からもっと多くの聖木を持ち帰るのに、人と馬、そして聖木を載せる荷台が必要になること。それが船の規模によって大掛かりな大移動になるであろうことを話す。
それともう一つ、俺はクラオーレ陛下に頼みごとをする。
「……申し訳ないのですが、前に報酬としてもらったウチの船を優先的に対応していただけると助かります」
「ふむ、どうしてだ？」
「少し気になることがありましてね。先に出港したいんですよ」
セイヴァーに会うなら、邪魔をされるわけにゃいかねえ。魔族のレスバを連れていることもあるし、俺達は先行して海へ出たいのだ。
恐らく船が完成すれば、本格的に魔族との戦いに移行する。相手の本拠地へ行くことができるなら黙っている必要もないからな。
しかし、魔王が知り合いであるなら全面戦争になる前に話をしに行く必要が出てきた。
そのため彼らよりも先に出港しなければならない。
「それは構わないが……エルフの集落へはリク殿が居なければ入れないだろう？」
「そうですね。だから向こうへ戻っている間に、今回持って帰った聖木を使って、俺達の船を改修



しておいてほしいんですよ。で、戻ってきたらすぐに出発できるように」
「リク様達だけで出港するのですか？　性急すぎるような……」
俺の言葉にキルシートが不安げに言う。俺達という戦力が、万が一にも壊滅すれば困ると考えているからだろう。クラオーレ陛下はキルシートに同意するように頷いた。
「うむ。キルシートの言う通り、海戦騎士団と君達、それと周辺国から志願者を募り、全員揃って魔王の根城であるブラインドスモークへ行けば、恐らく長きに亘る戦いに終止符が打てる。俺はそう考えているのだが」
「いい作戦だと思います。ただ、少しやることがありましてね。海の魔族幹部をなんとかしたいんですよ」
彼らの考えは分かるが、メルルーサと会うのに他の人間は必要ないからな。
軍事国家であるヴァッフェ帝国が『いける』と判断した書状を送れば、協力してくれる国は多いと思う。
さらに敵幹部を倒した実績もある俺達が一緒だと言えば、少なくともエラトリア、ロカリス、ボルタニアにグランシア神聖国は、今度こそ反撃をと考えるだろう。
……だが、そうなると常に行動を共にすることになり、メルルーサと話をするのに邪魔になる。
「それこそ一緒に行けばいいのではありませんか？」
「……海上の戦いは意外と難しいだろ？　だから幹部を二人倒している俺が先に行って倒しておく。万が一、作った船を沈められると困らないか？」

「確かに……少数の方がリク殿は動きやすいということか」
「そういうことです、陛下」
キルシートへの説明に、クラオーレ陛下は顎に手を置いて頷く。納得してくれたようだ。
「ふう、仕方ありませんね。では明日からリク殿の船に聖木を使うとして、エルフの集落へはすぐ出発されますか？」
キルシートはため息を吐いて不満げだったが、聖木を持って帰った実績がある俺の言い分を優先してくれた。
「準備を考えて二日後に出発ってところですかね。聖木の効果を試しておきたいですし」
「分かった。俺は各国へ書状を書こうと思うが構わんかな？」
「お任せします。楽観はできないので、覚悟のある人間だけ来るようにしておいてもらえると」
俺が真面目な顔でそう返すと、クラオーレ陛下も気を引き締めて臨むと言って謁見は終了した。
これで想定した計画はほぼ完了した。イレギュラーになりそうなのはレスバくらいか？
さて、イリスにセイヴァー……もう少しだけ待っていろよ――

◆　◇　◆

「戻ったぞー。大人しくしていたか」
「あ、おかえりなさい！」
【子供じゃないんですから当たり前ですよ？】



「あんたが一番危険なんだけどね？」
【うひゃ、うひゃひゃやめてくださいよ！】
『おかえりー、どうだった？』
案内された部屋に入ると、水樹ちゃんが笑顔で迎えてくれた。
目隠しを外されたレスバが得意げに問題ないと言い、夏那が襲い掛かっていた。二人がベッドの上で暴れ出すがそれはスルーして、俺は適当な椅子に座ってリーチェの問いに答えることにした。
エルフの森へ再び行くこと、次にここへ戻ってきたらすぐに出港するということ。最後はどうあってもメルルーサと対峙するであろうということだ。
「僕達は軽く聞いていましたし、異論はありませんけど、国王様達はそれで大丈夫でしたか？」
話を聞いた後、風太が質問を投げかけてきた。俺達が先行することに納得したのかどうかの確認だ。
「強引にだが了承してもらった。陛下達の大型船を作っている間にケリをつける」
「なるほど、確かにそれなら不自然ではないですね。先行して将軍を倒す、みたいなことを言ったんですか？」
「お、いい勘をしているぜ、風太」
船に乗れるようになったからといって海の魔物が減るわけじゃない。そいつらを操る厄介な将軍であるメルルーサを止めると言えば了承したくなると考えて説得したのだった。
「でも海って広いわよね。地図も無いしどうやってそいつを探すの？」

「そりゃお前……こいつの出番だろ」
俺はそう言って、レスバを指す。
【わたし？】
「同じ魔族ならこいつの気配で気づくはずだ。そのために俺達だけで出港する必要がある」
『そういうことね。わたしと一緒に空から探すのもアリかな。でも飛んで逃げるんじゃない？』
「こいつを使う」
リーチェの疑問に、俺はアキラス戦の時に作製したフック付きロープを取り出して笑う。
「ああ、身体に結んで凧みたいにレスバを飛ばすのね」
【酷い!? でも身体が反応しちゃう！】
「相変わらずよく分からない子ですね……」
水樹ちゃんが悶えるレスバを見て呆れていた。レスバはこういう芸風なので今更だろう。
それはともかく、もしこいつが役に立たなくても探しようはある。最終手段だから今は黙っておくが。
そんな調子で今後の指針を話し合った。
「とりあえずまたエルフの森と往復かあ……柔らかいお布団を堪能しておきましょう」
『わたしも寝るー！』
その後は昼寝や装備チェックをするなどしてゆっくり過ごした。



「皆さま、宴の準備が整いました。会場へご案内します」
「宴？」
そして夜になり、クラオーレ陛下は帰還した俺達への感謝を込めた宴を開催してくれた。
キルシートの案内で会場へ行くと、騎士はもちろん、使用人やメイドといった人間が集まり俺達を待っていた。
「リク殿の尽力により魔王討伐への一歩を踏み出すことができた！ この功労を讃えて、彼等に感謝を！」
クラオーレ陛下による乾杯の音頭が終わると、一気に場が騒然となる。
「リク様、こちらの料理をどうぞ」
「おお、サンキュー」
「こちらもいかがですか！」
「あ、ああ……」
「リク様は私の料理を食べるのよ！」
「私のよ！」
「まあまあ、両方ともいただくって」
なぜか分からないが、俺のところへ次々にメイドが料理を持ってきてくれた。どっちの料理を食べるのかといった喧嘩を始めたので諌める。
「なんだか女の子が増えていますね……！ そこはわたしの席ですよ！ ペルレと言います。よろ

しく！」
【ほほう、誰だか知りませんがその悔しそうな顔、いいですねえ……！　この男はすでにわたしのものです。諦めることですね？　あ、レスバです。よろしくどうぞ！】
「なんか似てるなあ、この二人……」
俺が困っている中、キルシートの妹でギルド受付嬢であるペルレがレスバと争っていた。
風太の言う通り、確かに似ている気がする。
「美味しい～！　これは疲れが吹き飛びますね！」
「お風呂も後で入れるし、ゆっくりさせてもらってからエルフの森ね！」
旅の疲れはあったが、楽しい夜を過ごした俺達はゆっくりと眠りにつけた。

そして翌日――
「遠征部隊の騎士はしっかりと選抜しておけよ」
「ええ、分かっていますよ、陛下。運搬任務にしては距離があるので、城の守りを優先します」
城の外で騎士の編制と準備を陛下とヴァルカが進めていてそんな話をしていた。
「ま、それがいいだろうな。往復の安全は俺が保証するぜ」
そこに呼ばれていた俺は、二人へ道中は心配するなと伝えておく。
ヴァルカの言う通り、運搬のみとはいえ往復でひと月半ほどかかる。
その間、城の守りが手薄になるのは避けたいので、数人いる騎士団長・副団長はお留守番となり、



三番手くらいの人間と兵士を借り受けることにした。
「ふむ、これで大丈夫だと思うが……冒険者はどうする、リク殿。雇うなら声をかけるぞ」
「そうだな……エルフ達も人間に対しての警戒は解いていない。それと冒険者が後で私欲に走る可能性がある。そいつは保留でお願いします、陛下」
「む、確かに。やめておくか」
信用できる冒険者なら連れて行くのはアリだと思うが、今回は断っておく。
「それでヴァルカ、いつまでに編制と準備ができそうだ？」
「今日中に編制は終わらせるぜ。準備はもう少しかかる」
「オッケー。なら、顔合わせと説明、それに馬車と荷台の用意を含めて……あと二日あればいけますかね？」
馬と荷台を用意するため、四苦八苦しながら駆け回る騎士と兵士を眺めながら、だいたいの日程を決める。少しくらいなら延びても支障はないか。
「そうだな。今から職人にかけあって追加の荷台を作ってもらおう」
「よかった。それじゃ俺はこれで」
「ん？　リク殿、どこへ行くのだ？」
俺が踵を返して歩き出すと、クラオーレ陛下が尋ねてきた。足を止めて顔だけ振り返ってから答える。
「仲間のところへ。訓練をチェックした後、ちょっと町へ出てくるつもりです」

「そうか。リク殿の船を作っている工員が後で来てほしいと言っていた。悪いがそっちにも顔を出してくれ」
「承知しました、陛下」
陛下とヴァルカへ片手を上げて挨拶をしてその場を立ち去ると、そのまま四人が居る訓練場へと足を運んだ。
「せい！」
「フウタ殿の一撃、重いですな……!!」
「まだまだ……!!」
「お、やってるな」
「あ、リクさん。今、風太君が騎士さんと模擬戦中ですよ」
「風太、武器の長さで有利を取りなさいよ！」
【相手、足が止まっていますよー】
水樹ちゃんが俺に気づき状況を説明してくれた。夏那とレスバは試合を見て白熱中のようだ。
俺が陛下に呼ばれている間は自主練をしたいと言い出したので許可した。が、騎士達と模擬戦をやっていたのは驚きだった。
「こりゃ副団長クラスでもないと、もう手に負えないかねえ」
「かもしれませんね。ウィンディア様と融合したせいか、風太君の動きが前と全然違うんですよ。こうやって一対一の戦いだとよく分かります」



俺が感心していると、水樹ちゃんが小声で感嘆の声を上げていた。ウィンディアの件は聞かれたくないから助かる。
「魔族相手だと集団戦が主だからな、一対一の模擬戦とはまた違うと思うが。っと、その話は後だ。風太の模擬戦が終わったら話がある」
「出発日が決まったの？」
「まあな」
俺に気づいた夏那が振り返って聞いてきたので頷いておく。
そこで風太の大剣が胸板に直撃し、騎士は大きく吹き飛んだ。
その瞬間、相手が手を上げて降参の意思を示したので勝負がついた。
「ありがとう……ふう……ございました！」
「はあ、ふう……いやあ、お強い……！　次は勝ち越してみせます！」
「やるな、風太。勝ち越しってことは何度かやったのか？」
「あ、リクさん！　はい、五本勝負で四本取りました！」
それを聞いて俺は口笛を吹いてから頭を撫でてやった。努力が実っている証だからな。それに、こいつは褒められて伸びる傾向にある。
「凄かったわよ。後であたしとも勝負ね！」
夏那が風太の背を叩きながら騎士へ勝負を挑んでいた。
「サラッと勝負を申し込むなよ。とりあえずこっちだ。皆さん、相手をしてくれてありがとう」

俺が肩を竦めて騎士達へ礼を言うと『どういたしまして』『またお願いします』と言ってくれた。
そのまま俺達は訓練場を後にする。
適当な場所で風太を休ませるかと、庭にある芝生に腰を下ろして話を進めることにした。
「とりあえず出発は二日後になった。馬車だけでも三十台以上、人間はさらに多い数での行軍になる」
「馬車が三十台以上……その数で往復になると大変な旅になりそうだ」
風太が汗を拭いながらそんなことを口にする。俺達だけでもかなり時間がかかったので、そのことを考えているようだ。
「襲撃、あると思う？」
「運だな。さすがに大部隊で行軍していたら、なにかあるなって、人間でも疑うだろ」
夏那の質問に推測を返してやる。
【確かに】
そこで神妙な顔をしたレスバが頷く。襲撃に来た仲間が殺されると考えているのかもしれない。
まあ、今のところ将軍とレッサーデビルだけしか出てきていないので、こいつの友人とやらは出てこないと思う。
……むしろ話を聞きたいから、残りの将軍が出てきてほしいところである。
しかし、行軍時は騎士達と一緒だからこっそり俺達にだけ襲撃をかけてこねえかな？　……無理か。



今まではグランシア神聖国やエルフの集落など、隠匿性の高い地域に居たのでなんとかなっていた。しかし、本格的に国と人間が動けば向こうも指をくわえて待っているわけにもいくまい。
【襲撃といえば、向こうへ送ったフェリスという人間もそろそろ催眠とかで口を割らされていると思いますぜ、旦那】
そこで、聖女候補だったが復讐に取りつかれ、今ではレスバによって魔族の島に転移させられたフェリスの名を、送った本人が口にする。
『あー、あるかも』
「旦那って……でも、確かにあり得る状況ですね」
レスバの言葉の意味を理解したリーチェと水樹ちゃんが頷いていた。
フェリスが俺達のことを知っているのはマイナス点だ。フェリス経由で俺達が勇者だと発覚し、レムニティを討ったことが知られたら将軍総出で襲ってくることが考えられる。
「ま、そうなったとしても邪魔をするなら……って感じよね。そういえば、あたし達もなにか準備するの？」
「そうだな。このあとは町に出て足りない食料とか買っておくぞ。ハリソンとソアラの身体も洗ってやらないといかんだろ」
「あ、やります、やります！」
買い物と馬達のお世話もすることを告げると、水樹ちゃんが手を上げていた。
申告すれば陛下が用意してくれるだろうけど、好きなものは自分達で選んで買いたいものだ。

ショッピングはストレス解消になるみたいだしな。
「その前に、今から港へ行くぞ」
「港……船はまだでは？」
「なんか技術者が俺達を呼んでいるらしいんだ。風太が休んだら向かうぞ」
「いつでも大丈夫ですよ！」
そんな話の後、程なくして城を離れて町へと足を運ぶ。
そのまま港へ行くと、俺達が運んできた聖木がキレイに加工されて並べられているのを確認できた。
「見事ですね」
「結構な数が加工できているけど、どうなんだろうな？」
「もうできそうじゃない？」
夏那が唇に手を当てながら聖木を見ていると、屈強な奴が近づいてきて口を開く。
「おう！　お前達がこれを持ってきてくれた奴等か？　陛下に聞いてこっちに来てくれたんだな」
「あんたは？」
「俺はカリス。この港の船を預かる技術職人ってやつだ」
そう言って歯を見せて笑うカリスが手を出してきたので、握手をする。
カリスはそのまま全員と握手を交わすと、聖木を指して言う。
「こいつは乾かして使う必要があるからもう少しかかる。それにしても、よくエルフと交渉できたもんだぜ」
「ま、向こうでエルフを襲った将軍を一人倒したからそれくらいは融通が利くのさ。よろしく頼むぜ、帰ってくるまでに仕上げておいてくれ」
「任されたが……中型船でいいのか？　海にも将軍クラスがいるって話だろ？　海騎兵を連れて行った方がいいと思うぞ」
カリスが肩を竦めて陛下達と同じことを口にするが、俺はそれを手で制してから言う。
「俺達が乗れるだけで十分だ。先行して海の様子を見るのが目的だしな。将軍クラスは俺が倒せるから、特に問題になることもないだろ」
「ま、そう言われたら違いねえ！　戦える奴の言葉なら従う。だが――」
「だが？」
「……調子に乗って死んだ奴は多い。気をつけろよ」
「ああ」
「それで、私達を呼んでいたそうですけど、どういったご用でしたか？」
そこで水樹ちゃんが俺達を呼んだ理由を尋ねると、カリスは手をポンと打ってから口を開く。
「ちょうど話していた内容と被るけど、どういったデザインや内装にするか聞きたくてな」
どうやら船の建造について聞きたかったらしい。
とりあえずこの五人が乗れて、排泄物を流せるトイレ的な場所、仮眠が取れるところなど必要なものを作るよう頼んでおく。

「まさか手漕ぎ……!?」
「そんなわけあるか、夏那。帆を使って風で進むやつだ。風太の得意魔法だから無風でも進めるだろ」
「お、僕が役に立てそうですね」
風の魔法が得意な風太が色めき立つ。こういう時こそ適材適所ってな。
帝国でやることはこれで概ね終わったか。
――目的、人員、作業量。
やるべきことをしっかり確認しておくことは重要だ。
今回のエルフの森行きは俺達だけじゃなくて騎士達が随伴するため、より一層の緊張感を持って対応しなければならない。
騎士はざっと百人ほど借りているので、固まっているところを襲撃されたら危ない。
往復している間に完成できそうなデザインと内装をカリスへ伝えてから、俺達は町へ出て買い物に移った。

「あの服、ちょっと欲しかったわね。青がキレイだったもん」
【カナには赤い服の方が良さそうですけどねえ。お馬さんのブラシを新調したのは良かったです】
「肉が少ないかな？」
「そっちは陛下に期待して、お野菜をなるべく食べた方がいいってリクさんが。ハリソン達もお野菜が主食だしね」
エルフの森へ遠征するための買い出しはいつもと違い、実用的なものを買っていた。夏那も服は見ていたが、買うことはなかった。
前にグランシア神聖国に行った時は観光気分だったが、再遠征とその後にある船旅は遊び気分ではいけないと気を引き締めているようだ。
レスバというイレギュラーは居るが、頼もしいと俺は三人の背を見てそう思う。
ひとまず出発まで訓練はやめ、休むのも仕事だと俺達は準備を進めていった――

◆　◇　◆

「ふあ……休みなんてあっという間だな……お、どうした？」
そして出発当日。テラスに四人とリーチェが出ていた。
どうやら下を見ているらしい、夏那達のところへ行く。
「よう、なんか面白いものでもあるのか？」
「いやあ、馬車もかなりの数を用意したわねって」
『そりゃ大きな船一隻を作ろうと思ったら、木材の量は半端なく必要だからね。これでも何隻できるやらって感じ』
「……凄いな。これだけの数で移動するのは初めてだ」
夏那とリーチェが話す横で、風太がテラスの縁に片腕を置いて息を呑む。俺も視線を向けると、

眼下には続々と騎士と馬車が集まっていた。
それでもリーチェの言う通り百台ほどの馬車に聖木を積んでも、一から組むなら船は多くできない。それは前の世界で体験済みだ。
確実なものを作るなら時間がかかるし、これなら俺達が出た後の時間は稼げるだろう。
「あれだけ人が居ると気を使いそうですね」
「ま、仕方ない。これも先へ進むための仕事だ」
実際、遠征が始まると面倒が増えるもんだ。今までの旅がいかに楽だったか分かるだろう。三人にはこれを経験の糧(かて)としてもらいたい。
「さて、と……いよいよ出発ですね」
「そうだな、水樹ちゃん。みんな、準備はいいな？　そろそろ俺達も降りるぞ」
「はい！　……本格的にリクさんの計画が始まりますね」
「ここでエルフと人間に確執ができたら本当に終わりだ。騎士達の動向には気を配っていこう」
水樹ちゃんの言葉に頷いてから四人へ目を向けると、真剣な顔で頷いてくれた。今、一番恐ろしいのは魔族よりも人間だ。
すると、そこでレスバが腕組みをして頷きながら話し出す。
【ま、そうですね。自分の利益になるなら他人を裏切るのは、人間も魔族も変わらないですもん】
『レスバの言いたいことは分かるけど、魔族の方が手柄に執着し過ぎだと思うわ』
リーチェがレスバの頭に乗ってそう返すと、彼女は鼻を鳴らして言う。

【ウチらは実力主義ですからねえ。わたしもほら、あなた達の寝首を……みたいなことを考えているのですよ……！】
「それを言ったら意味ないと思うけど……」
【ああ……確かに⁉】
レスバの言葉に突っ込む風太だが、すでにこいつの敵意は消えているので、寝首のくだりは冗談である。
なぜか？
実は三人だけでエルフの集落に行ってもらったあの時、二人だけで話をしていた。
グラジールを俺があっさり殺しているのを目の当たりにしていることから、死にたくない思いで逆らわないと決めているらしいと、その時は聞いた。俺が魔王を知っているという部分も大きいようだ。
それにお互いの利害が一致しているのもある。というような話をしていたのを、俺は思い返す。

◆　◇　◆

【――というわけで、わたし達は普通に行為をして繁殖します。それはともかく、わたしも魔王様がどうして人間に戦いを挑んだのかを知りたいんですよね】
「なぜ、どうでもいい性事情の話をした？　まあいいけど。で、お前の言いたいことは俺も『当時』から気になっていた。イリスの話だといきなり開戦だったらしいし」



レスバと話をする中、セイヴァーが急に侵略を始めた理由を知りたいと口にした。そこで俺はもう一つ気になることを聞いてみる。
「前の世界でお前を見たことはないが、ドーナガリィのような中級クラスの魔族は居た。しかし、それ以下になるとレッサーデビルばかりだった。それはなぜだ？」
【わたしは力がありましたけど、前の戦いは参加していないんですよ。だから見たことがないのはその通りでしょう。で、おっしゃるとおり魔族にも力の上下はあります。例えばわたしのおばあちゃんだと人間と戦えば確実に負けます】
「個体差があるってことか」
俺の言葉に頷くレスバ。
どうも魔王に生み出された将軍クラスの個体と、いくつか能力が高い魔族しか戦いに出ていなかったようだ。
兵士となるレッサーデビルは人間の身体から作るか、魔力で生み出せるゴーレムみたいなものらしい。ちなみに人間から作った方が強力だという。
そこでやはりというか、疑問が鎌首をもたげてくる。
「なら直属の魔族以外は普通の人間と同じってことか？」
【いえ、さすがにわたしのようにピチピチの若者なら話は違います。少し能力が低かったとしても、それは魔族レベルのことなので人間に比べれば強いですよ】
それでも強い冒険者などと戦った場合、確実に勝てるかと言われれば微妙だそうである。

強力な将軍と副幹部。そしてレッサーデビルという無限の戦力で戦いを続けるつもりだったのか？　いや魔王は、ジリ貧になったからこそ聖王都を強襲したと考えるべきか。
そうなると戦力的に、喧嘩を売るにはやはり少々無茶があると感じる。
思い返してみれば、魔族がアドバンテージを取れていたのは強襲による不意打ちがメインだったからだ。
そのまま落とした国をいくつか持っていたことと、アキラスのような暗躍が上手い奴がいただけで、直接戦闘はレッサーデビルの数で押してきただけだったような気もする。
【というわけで、わたしは皆さんと一緒に居れば、裏切り者として始末される可能性が高いです。しかし、捨て駒になるのも面白くないので、協力できることはしますよ】

◆　◇　◆

――という感じの話をしていた。
お互いの不明点を解消するため、将軍であるハイアラートやグラッシあたりが出てきたら、ぶっ飛ばした上で同行させることを考えている。
「どうしたの？　難しい顔をして」
「うん？　ああ、この行軍中に魔族が襲ってきたら面倒だなと思っていた」
夏那が不思議な顔をして尋ねてきた。俺はもっともらしい返事をしておく。
「確かにそうですね。でも、風太君も強くなったし、リクさんも居るからきっと大丈夫ですよ」



『そうね。カナとミズキもいい感じだし、あの時よりは格段に楽になっているわ』
「クレスとロザも強かったんだけどな」
リーチェが前の世界の仲間の話を持ち出した。確かに今回は勇者が三人も居て楽だが、決してあいつらも弱かったわけではない。
『もちろんそれは知っているけど、やっぱり魔族の物量には勝てなかったし、ね……』
「リーチェ……」
前の世界のメンバーとも仲が良かったからな、リーチェは。
俺がもっと強ければロザは死なずに済んだかもしれないし、決戦でハイアラートの誘いに乗らなければ犠牲者は減っていたはず。俺の分身でもある彼女はそう思っているのかもしれない。
「……とりあえず下も揃ったみたいだし、降りようか」
【そうしましょう。お城のご飯ではなく、カナの料理になるというのはいささか不満が残りますけども】
「こいつ……!!」
「出発前に喧嘩をするなっての」
風太が神妙な顔で移動を促すとレスバが茶化した。一応、空気を読んでいるのかね、こいつは。
そんなやり取りの中、俺達は装備と荷物を確認してから、外へ出て厩舎へ向かった。
「また頼むわね」
洗ってキレイになったハリソンとソアラを引いて訓練場に行くと、騎士達がせわしなく動いてい

た。出発の最終チェックをしているみたいだな。
俺達とほぼ同時にクラオーレ陛下やキルシート、そしてヴァルカが姿を見せた。
「待たせましたか、申し訳ない」
「いや、俺達もちょうど来たところだよ」
「オッケー、ひとまず集めるか。おい、お前達！　集合！」
俺がキルシートの言葉に返していると、ヴァルカが手を叩いて騎士達を集めた。整列したところで水樹ちゃんが挨拶をする。
「おはようございます、皆さん！」
「おはようございます!!」
「うわ!?」
「でかい声!?」
【これだけ人間が居ればそうでしょうねえ】
挨拶の瞬間、その辺の木に止まっていた鳥が慌てて飛んでいくのが見えた。
レスバの言う通り、百人ほどが集まって声を出しているからそうなるだろう。日本の運動会でも結構な喧騒だからな。
「では手はず通りお願いします、リク殿。我が騎士団を使ってください」
「ありがとう、キルシート」
「私達が騎士さん達を先導するんですね……」



水樹ちゃんが息を呑むのが分かる。
今までは俺達だけの行動で責任も個人だけだった。しかし、今からこの騎士達をエルフの森まで『俺達が連れて』行かなければならないのだ。
緊張するのは当然である。なにかあれば責任はこちらにも発生する。
「ま、それも含めていい経験になるかな？」
「どうしたのよ、急に？」
俺がフッと笑って三人を見ると、夏那が怪訝な顔で口を尖らせた。
「いや、こういうのは学校でもなかなか得られない経験だよなってな」
「異世界はさすがにね」
意図が伝わり夏那が肩を竦めて首を横に振る。これ以上は他に居る人間に聞かれると面倒なので夏那の頭に手を乗せて笑い、会話を打ち切った。
そのまま俺達はクラオーレ陛下の前に立ち、一礼をする。
「では、我々はこれから騎士団を預かり、エルフの森へ向かいます。その間、帝国の防衛が薄くなることをお許しください」
「良い。その代わり魔族に対する反撃ができるようになるのならば、多少の我慢はしよう。前回以上の成果、期待している」
「承知しました」
俺はハッキリと答えて小さく頷く。

一緒に居たキルシートや、いつも笑っているヴァルカも神妙な顔で俺達を見ていた。
俺にとってはこの遠征は魔王に会いに行くための建前だが、彼等にとっては死活問題。利用させてもらっているが義理は果たすべきだろう。
そのまま陛下やキルシート達と少し会話を交わして、騎士達が陛下への挨拶をした。
これで全ての準備が終わったので出発となる。
そしてみんなが持ち場につくため一時騒然となる。
「しばらくの間、よろしくお願いします！」
「こちらこそ、フウタ殿！」
「カナさんと肩を並べて戦えることを光栄に思いますっ！」
「あはは、無理しないで行くわよ！」
「ミズキさん、旅の途中で魔法を教えていただきたいのですが！」
「えっと多分、リクさんの方がいいですよ……」
魔族の副幹部を倒した三人も騎士達に一目置かれているため、通りすがりに握手を求められ、挨拶を交わしていた。
【わたし！　わたしには……！】
「誰だ、あれ？」
「さあ……フウタさん達の召使い、とか？」
なぜかレスバが、自分のところへ誰も来ないと手を上げてアピールをしていた。だが、当然知っている奴はいないので騎士達は首を傾げるばかりだった。
【いくらなんでもぞんざいな認識じゃないですかね……】
「いや、あんたはそんなもんでしょ」
三人はこの国の人々に勇者と明かしていないが、戦闘力の面で認知されている。そのあたりは狙っていたところもあるから止めなかったが、良かったかは半々だ。
というのも、前の戦いと同じく、セイヴァーを倒したら俺だけ強制送還という可能性もある。
その場合、この世界に三人だけが残っても、強者であると認識されているヴァッフェ帝国で暮らしていけるだろう。レスバもそのまま一緒に居そうなのがどう転ぶか――
って……心配ばかりでなんか親戚のおっさんって感じだな、俺。
「お待たせしました！　行きましょう！」
「よし、ハリソンにソアラ、出発だ！」
挨拶が終わったようで、水樹ちゃんが声をかけてきた。
馬車へ四人が乗り込んだところで世話になる二頭へ話しかける。
すると二頭は俺の言葉に『分かりました』といった感じで鳴くと、ゆっくり歩き出す。
「さて、外に出たら手はず通り、俺達は三つに分かれて騎士達の間に入るぞ」
「はい。私と夏那ちゃんとリーチェちゃんが中央付近で……」
「僕が先頭に入ります」
「で、俺とレスバが最後尾。オッケー、覚えているな」

【バラバラで移動するのは大丈夫なんですか？】
「三人はここに居る騎士達よりも確実に強い。そして彼等もそう思っている。だから安心感を与える意味でも必要だ」
レスバの質問にそう返すと、【人間は色々大変ですね】と目を丸くしていた。
この体制は即興だが、きちんと理由を考えて構成している。
風の大精霊の力を借りる風太は、戦闘面でかなり頼りになるので前線を任せることにした。
ここでなにか問題があれば、精霊を通じて中間地点に居るリーチェに情報が飛ぶ。
リーチェとウィンディアは遠くでも意思疎通ができるのは確認した。
そしてリーチェと意思疎通できる俺が最後尾に居れば、対応はいくらでもできるという形だ。レスバには伝えていないが、スマホもあるので連絡手段はなんとでもなるしな。
そういや風太は、重要な先頭を任されたことを喜んでいたな。まあ騎士が一緒なら無理はしないだろう。
俺が最後尾なのは前方の様子を見ることができるのと、一番危ない背後からの攻撃への対策としている。小規模でも結界を張ったまま移動すれば、奇襲は受けにくいと判断したのだ。
城から町へ出ると、どこからともなくペルレが現れて俺達へ手を振ってきた。
「リクさん、頑張ってくださいね！」
【言われなくてもそうしますが？】
「あなたに言った覚えはありませんが？」



【ぐぬぬ……】
「おのれ……」
「元気でな、ペルレ。キルシートによろしく。おい、身を乗り出すなレスバ！　危ねえぞ！」
【あひん⁉】
ソアラの上に移動して睨みを利かせるレスバを見た俺はぎょっとして尻を叩く。こいつはたまに驚かせてくれるぜ……
そしてそのまま俺達の馬車はゆっくりと町中を進んでいく。
……これが現地人と関わる最後の行動になるといいんだが。
横目で港を見ながら俺はそんなことを考えていた。さて、道中なにもないことを祈るとしようか。
「では僕達は先頭に行きます」
「またね、カナ、ミズキ！　あと知らない人！」
【知ってくださいよ！】
宴の席で自己紹介したペルレに、知らない人と言われてレスバが叫んでいた。
「暴れるんじゃないわよ、レスバ？　水樹、あたし達も行こう！」
「うん！　それじゃあリクさん、また後で！」
町を出た俺達はそれぞれの別の馬車へ移動する。
全員を見送った後、俺は最後尾で前を見ながらポツリと呟く。
「まずは聖女の婆さんのところだな」

【あのお婆さん怖いから嫌です……】
怒鳴られたのがトラウマになっているレスバに苦笑しながら、こちらもゆっくりと歩を進めることにした。

## 第二章　旅の途中で考えること

――旅は概ね順調に進んでいた。
出発して五日ほど経ったが、命知らずな魔物が稀に出てくる程度で、騎士達のいざこざなどもない。
俺の下を離れている風太達も、それぞれ騎士達と仲良くやっているようだしな。
それでも、現地人とあまり仲良くするなという言いつけを守っている節はあるため、真面目だなと苦笑する。
さて、そんな旅だが懸念すべきことがいくつかある。
一番はフェリスを通して俺達の存在を魔族側が認識してしまうことだろう。
そうなればこの行軍はかなり危ない橋を渡っていることになる。
空を飛べる相手が襲撃してくることがあれば、死傷者を覚悟しなければならない。
【難しい顔をしていますねえ】



「そりゃあな。これだけの人間を連れて移動しているから将軍が出てきたらかなりきつい」
【そこはこのレスバさんにお任せで？】
「最終手段だな、それは。魔族と和解までいかなくとも、休戦はできそうだが――」
――この騎士達が居る状況で襲われた場合、魔族を説得するのはリスクが高い。
会話を見られた場合、魔族と通じているなどと思われる可能性があるからだ。
いくつか回避策を考えてはいるんだが……できればそういった状況は避けたい。
【なら、あの三人を手元に置いておいた方が良かったんじゃないですか？　いつも心配しているような感じがしますし】
「少し前ならそうしただろうな。だけど、風太が大精霊と契約したし、この先のことを考えるとこういうのも必要かと思ったんだ」
【先のこと、ですか】
そう、先のことだ。
今のところ三人は、一緒に魔王の下へ行って話を聞く予定になっている。だが、話し合いにならないと判断した場合、俺はあいつらを逃がすつもりだ。
歳を食った俺が魔王を倒せるかどうかは半々ってところだろう。
俺が負けた場合、恐らくセイヴァーを倒せるのは風太達だけになる。その場は逃げて後から力をつければ対抗できるようになるはずだ。別に積極的に倒さなくても、向こうから襲ってきたのを倒すだけでもいいしな。他には火や水の大精霊を探すのもアリだ。

【……なんだか死にに行くみたいな言い方ですよ、リクさん】
「お？　そのつもりはマジでないぞ。まあ、前の世界のこともあるし、ちょっと悪い方に考えが寄っているかもしれないが」
【あの三人から離れて本音が出ているんじゃありませんか？　頼られるのはいいことですけど、ずっと気を張っていると疲れちゃいますよ】
「魔族が知ったようなことを言うなっての」
【ご明察のとおり、ミズキの受け売りですよ】
などと言って、シッシッシと変な笑いをするレスバ。
……前世界でもずっとそうだったからそういうもんだと思っているけどな。
しかし、当初は高校生達を戦いに駆り出さず帰すつもりだったんだが、上手くいかないものだぜ。
【わたしの記憶もよく分かりませんし、早く魔王様に会ってくださいね】
「ああ、その件もあったな。セイヴァーの前に、メルルーサが俺を覚えているかどうかがカギだな」
レムニティとグラジール、それとレスバ。
二人の将軍とは以前、戦っているので、顔を見れば分かりそうなものだが、話した感じ本当に知らなかった。だが、少し気づいたことがある。
キーになるのは『召喚』だ。
俺は手に持つ本に目を向ける。



【そういえば三人が居ない時、その本をずっと読んでいますね？　なんですか？　面白……いや、まさかエッチな本……】
「違うっての。そういやそういうことも全然してないな」
【へっへっへ、お兄さんお相手しやす……いだぁ!?】
「夏那と同じくらい貧相なくせになにを言ってんだ、ああ？」
【あ、最低ですね！　カナに告げ口をしますからね！】
「へいへい、好きにしろっての」
横でキーキーうるさいレスバは放っておいて、もう一度本へ視線を戻す。
これは以前、グランシア神聖国の書庫から持ち出した本だ。
実は手が空いている時に読んでいるこれこそ、俺が気づくきっかけになったものだ。
メルルーサに出会った時に記憶を持っていなければ恐らく俺の予想は当たっていると思う。
そんなじゃれ合いをしていると、馬に乗った騎士が近づいてきて声をかけてくる。
「リク殿、楽しそうですね」
「そう見えるか？　どうした、なにかあったか？」
「いえ、先ほど、先頭のフウタ様が魔物と遭遇して倒したのでご報告です」
「お、そうか。サンキュー」
進行が止まらずに倒したということは、即座に始末したってところか？　数が少ないのもあるかもしれないが、あいつも強くなったなと思う。ホント、最初のプランと変わっちまったな。

「リク殿のパーティはみなさん強いので安心ですよ」
「俺は複雑だけどな。他に問題はありそうか？」
「今のところ特に大きな問題はありません。ただ、キャンプ生活に慣れていない者がいるので、ケアが欲しいところです」
「甘えてんな……と、言いたいところだが、士気に関わるか。次の町に到着したら希望者は宿に行かせていい。ただ、その次の町は宿に泊まらなかった騎士を優先しよう」
「ハッ、次の休憩で伝達しておきます！　ありがとうございます！」
恐らくこの話がメインだったなと胸中で考えながら、離れていく騎士を見送る。
【キャンプ生活、悪くないと思いますけどねえ。テントもあるし】
「冒険者ならいざ知らず、ほとんどの騎士は家や宿舎でしっかり休んで、規則正しい訓練をしている。そんな連中にはキツイもんだ。これは実体験があるから間違いない」
聖女の護衛であるクレスが最初に旅に出た時の狼狽ぶりは傑作だった。トイレはその辺の草むらでするんだと告げたら凄い冷や汗をかいていたっけな。
用を足すのに鎧を脱がないといけないが、その際、魔物に襲われたらとビクビクしていたことを思い出す。
「……懐かしいな」
もう一度だけでもいいから会ってみたい。イリスには会えそうだが、他にもお礼を言いたい奴は多いからだ。死んでしまった者達を含めて、もう一度。



「叶うだろうか……」
【なにがです？】
「あ、いや、なんでもない」
いつかは必ず来るし、それは近いかもしれない。とにかくまずは目の前のことを片付けるとしよう。

そして魔族の襲撃がないまま俺達はグランシア神聖国まで行くことができた。俺達は少しずつエルフの森へ近づいていく――

◆　◇　◆

【……アキラス、レムニティ、グラジール……あの三人はどこへ行った……？　各国は健在なのに姿を見せぬとは】
【如何しますか？】
【人間どもに殺られたのであれば自業自得だが、それほど強力な戦士が居るなら慎重に動かねばなるまい。レムニティが連絡を寄越さないのは気になる】
【では、引き続きレムニティ様とガドレイの捜索を……ん？　なんだ、随分と人間が多い。遠征でしょうか？】
グランシア神聖国上空で、魔族である二人組がそんな会話をしていた。

一人の魔族は将軍だった。彼はアキラスやグラジールはともかく、真面目なレムニティが連絡を断っていることが気になっていた。

定期連絡がなかったため、ヴァッフェ帝国周辺を偵察したがレムニティは見つからず、ロカリス王国を攻撃していたアキラスも見つからない。

そこでなにかあったのかと魔王の下へ戻ろうとしている最中だった。そこで運が良かったのかリク達の行軍を見つけたのである。

【どこへ向かっているのだ……？　魔王様のところだろうか】

【メルルーサ様が健在であれば陸路で島に近づいても海は渡れません。人間達もそれは知っているはずです】

【ふむ。では襲撃して吐かせるか】

【いえ、待ってください。どこへ行くか見届けましょう。そこで一網打尽……いかがです？】

その言葉に将軍と思われる長髪の魔族がにやりと笑って頷いた。

◆　◇　◆

「――グランシア神聖国はよく全員分の寝床を用意していたもんだぜ」

「だいたいどれくらいの規模か、メイディ様が予知していたんじゃない？」

「お、それはありそうだな」

俺達の旅は順調すぎるほど順調で、何事もなく二日ほど前にグランシア神聖国を経由していた。



立ち読みサンプル
はここまで

今は休憩と打ち合わせを兼ねて、夏那や水樹ちゃん達と話している最中だ。

ちなみに、話に上がっていたグランシア神聖国では到着早々、町の人間に歓迎された。

騎士を含めた全員を町中で休ませてくれたので、ひとまず疲れを癒すことができたようだ。

全員が建物の中ではなかったものの、風呂や食事はキャンプとは比べものにならないため、ゆっくり休めたのは間違いない。俺達は神殿で休ませてもらったけどな。

「メイディ様は騎士さん達の前へ出てきませんでしたね」

「自国の人間以外には姿は見せないんじゃないかい？　僕達も呼ばれてから会えたわけだし」

「だな。まあ婆さんが聖女じゃがっかりされるから姿を出さないのかもしれない」

【たまにアホなことを言いますよね、リクさん】

「あ、やっぱ分かる？　前も自分は魔族だなんて言って寒かったわ」

【へえ……】

レスバと夏那の視線が冷たい。しかし、その程度で怯む俺ではない。咳払いを一つしてから話を進めることにする。

「コホン！　それはともかく各部隊に問題はないか？」

「僕から夏那達までの騎士さんは大丈夫です。けど、ちょっと足が遅れている馬がいますね」

「騎士達の動きはどうだ？」

「戦闘でも先陣を切って戦ってくれていますよ。エドワードさんという方が張り切っていますね。あ、もちろん休憩は取っていますよ」